



## 小史・全道展15年

戦後・北海道美術史ノートから

竹岡和田男

I

昭和二十年八月十四日、日本は無条件降伏を要求する米、英、中、ソのポツダム宣言を正式に受諾、翌十五日には天皇みずから終戦の大詔を放送した。約三百万の人命を失い、六百五十億（当時の価値）の富を投げた太平洋戦争の終結である。そして残されたのは瘦せおとろえた国民と、混乱した経済と、荒廃した国土と、頹廢した世相、無能卑屈な政治であった。

当時の北海道に、戦前から引きつづき存在していた美術団体は北海道美術協会（道展）ただ一つである。大正十四年に発足した道展は文字どおり北海道美術界の支柱として活発に展覧会を開き、いく多のすぐれた作家を育てた。しかし太平洋戦争はこの一地方展にすら、深刻な影響を与えている。作家の戦争動員、題材の束縛、作品の輸送難、このため昭和十九年の第二十回道展は帯広、函館、小樽、札幌の四会場に分れて開催という非常措置をとらなければならず、昭和二十年はついに開催をとり止めなければならなかった。同時に道展には内部的な悩みもあつた。すでに二

十年の年輪を重ねた道展は包容する作家の数も飽和状態に達し、活動の不活発と相まって、やがて沈滞からの脱出をはからなければならなかつた。そのうえ、当時の社会情勢全体からみると、道展の戦争協力にたいする批判も決して甘くはなかつたし、いわゆる疎開作家と定着作家の間の溝も皆無とはいえなかつた。それらのしこりを一掃して、北海道美術界の新しい出発を願う声も次第に大きくなつて行つたのだ。それが終戦——新秩序への志向というこの時期に、とくにはつきりと自覚されたのである。そして大勢は道展の発展的解消、新展覧会の組織、発足という方向に流れていった。

「新しい展覧会を作ろう」この声は間もなく具体的な動きとなつて現われた。当の道展内部では繁野三郎、国松登、伊藤信夫ら北海道にいつづけた会員たちがその必要を痛感し、元老格の今田敬一、能勢真美らを説いた。東京から郷里に疎開中だった会員たち、山内壮夫、菊地精二、小川マリらも同調した。あくまで新しい意気に燃える展覧会の発足を願うという点から、これら道展の動きは、単なる道展の革命という小規模なものではなく、さらに



# ホクレン

広い幅を持つ美術界の建て直しに発展する。やはり疎開して在道中だった田中忠雄、松島正人（正幸）上野山清貢、三雲祥之助、荒井竜男、一木万寿三、川上澄生、小川原脩、斎藤広胖、西村喜久子、居串佳一らの北海道出身、関係作家も積極的に仲間に加わった。在住作家の橋本三郎、木田金次郎、池谷寅一、大月源二、高橋北修、田辺三重松も相談に入った。日本画の本間莞彩も。北海道新聞社がこの計画を援助し、戦時陸軍中尉として旭川の陸軍報道部に勤務し、もつとも美術界の事情に通じていた岩船修三が、交通事情の悪い中に地方の作家たちの連絡に走り回った。

下準備は札幌・小樽の作家を中心として、十数回にわたって行なわれた。戦争の激化と敗戦の虚脱感、道展の沈滞と北海道美術界の空白化、そこからまったく新しい構想の活発な展覧会を作り出そうというのだからみんな張り切っていた。松島正人が手に入ってきたドラム罐のガソリンに、リンゴの汁やサッカリンで一生懸命に味をつけ、うまいうまいとみんな飲んで飲んだ。六ばい飲んだら死ぬぞといわれ、五はいままでなら大丈夫だろうとコップをおおった。八月末にイモや大根を持ち寄って結婚披露をしたばかりの三雲祥之助と小川マリが、お熱いところをみんなに冷やかされながら議論を戦わせていた。描きたいものを描こうと意欲を燃やし始めたころだ。絵の具も十分ではなかつたが、従軍したときにもらった絵の具を大事にしてみんな使っていた。松島正人、居串佳一、繁野三郎は中千島、国松登は北支、中支と中千島、上野山清貢はキスカ、占守島、菊地精二は北支、田辺三重松は千島、大月源二、能勢真美も千島と、それぞれ従軍して死線をさまよってきた人たちだった。

みんな目を輝かせて、よくしゃべった。

「作品の質だけがものをいう純粋な展覧会にしよう」

「傾向にこだわらず、どのようなものにもかたよらない、それぞれの個性を生かした展覧会にしなくては意味がない」

「すぐれた作家が、すぐれた作品だけを並べる同人展にしたらどうだろう」

「いや、発展的解消する道展にかわつて、北海道ただ一つの大きな展覧会となるのだから、新人育成の意味からも公募展にならなくては駄目だ」

「全道美術協会（全道展）」という名称は繁野三郎がつけた。新美術展、創生美術展などいくつかの案が持ち寄られたが、この展覧会は文字どおり全道的なスケールを持ち、全道の有力作家を一堂に集めるものに発展するんだ。「全道展」がいいじやないか」と繁野三郎が発言した。みんな即座に賛成した。そして翌二十一年から本格的な展覧会を開催することに決め、準備段階は終わった。

昭和二十年十一月、全道美術協会は設立され事務所を北海道新聞社においた。その創立宣言はつぎのようにその目的をうたう。

「北海道の美術文化の水準を高めてこれの普及に貢献することを目的とし、北海道新聞社の後援を得て、道内道外に在るを問わず、北海道出身の下記作家をもつて本会を結成す。居串佳一、池谷寅一、一木万寿三、伊藤信夫、岩船修三、上野山清貢、小川マリ、小川原脩、川上澄生、菊地精二、木田金次郎、橋本三郎、松島高橋北修、田中忠雄、田辺三重松、西村喜久子、橋本三郎、松島正人、三雲祥之助、山内壮夫。」荒井竜男は疎開先の札幌からいち早く引き揚げて東京に帰り、本間莞彩は日本画家としてただ一人だったため参加を見合わせ、大月源二も参加をとり止めた。複雑な立場に追いこまれたのは道展の中核会員だった今田敬一、能勢真美、繁野三郎はじめ、道展会員の資格のまま全道展の創立に参画した人たちである。全道展の設立は、道展の解消という大勢判断のうえで企図されたものであつたが、道展の行く手を決める会員総会は、相互の連絡が杜絶した当時の情勢では一向に開かれる気配もなく、逆に若手会友たちが、全道展の設立計画と相並んで、道展再建運動に乗り出していた。全道展一本という構想は、道展との並立に変更を余儀なくされ、今田敬一と能勢真美は全道展創立宣言の発表直前に道展への残存を決め、板ばさみに合つて迷つた繁野三郎も、二十一年の全道展創立展のち、第一回公募展の

そぼくで高雅なふんいき

つむぢ  
糸由

バ — 糸 札幌・南5西2 TEL②6066③1863  
クラブ 糸 札幌・南5西2 TEL③9078

前に道展に戻った。従つてこれらの作家は現在全道展創立会員として記録されていない。


大きな波紋を投じた中で全道美術協会が創立展を開いたのは昭和二十一年六月のことである。札幌三越デパート(当時旧豊平館で営業)の会場に、創立会員および、会で選抜した招待作家の作品がずらりと並べられた。戦争中の聖戦美術展以来、はじめて北海道で開かれたスケールの大きな展覧会である。北海道関係の第一線作家がやつとかちえた自由をのびのびと謳歌してキャンパスにその感動をぶちまけた、東京で各会が展覧会を復活させたのもこの年であり、地方で早くも盛り上がりを見せたところは他に例がない。招待者の中では諏訪田勝衛、石沢ミヨ、三上恵美子、池田(沢田)豊二、田辺謙輔、金子幸正、宮下貞一郎らがりつばな作品を見せ、田辺、金子、宮下は新会員に迎えられた。宮下の参加により、全道展は最初の油絵、水彩画、版画、彫刻に、工芸の部門を加えることとなった。

## II

戦争が終わつてから一年たつた。この一年間のめまぐるしい世相の変化、その年に生きていたものなら、だれもが一生忘れることはできないだろう。日本の歴史が完全に書きかえられたのである。占領軍進駐(二十年九月)財閥解体と農地改革(十月〜十二月)天皇神格を否定(二十一年一月)軍国主義者の追放始まる(一月)婦人参政初の総選挙(四月)東京裁判開廷(五月)——その一つ一つは日本をはじめ近代の世界に導いて行く、夜明けのできごとだった。だが日本は一方に目を開く喜びを味わいながら、一方には疲れ切つた窮乏のどん底に追いこまれて行つた。こうした中で誕生した展覧会が世に迎えられたのは、鑑賞者の美への憧れがとりわけ強かつたためかもしれない。戦争でないものをモチーフとした作品は、鑑賞者の憩いを寄せる場だったのかもしれない。作家は確かに自分の建て直した懸念だった。本格的に芸術的な意欲を燃やすよりは、その地固めとして身辺の題材で習作にと

りかかつた。周囲の情勢は一日が一年に相当するようなスピードで変わつて行つたけれども、作家たちは、一人一人についてみれば懸命に地道なトレーニングに努めていたのである。しかし燃焼し切つた芸術的な感動はなくても、そこにとにかく美がある、安らぎがある。展覧会は、それが苦しい時代であればあるほど鑑賞者の生活と密着した。昭和二十一年十一月の第一回全道美術協会公募展は満員の盛況だった。

作家たちは製麻会社から分けてもらった麻布でキャンパスを作り、手製の額縁で作品を飾つた。鑑賞者たちは静かな風景画を見て平和をむさぼり、南瓜の絵を見てごくりとつばをのんだ。いままから考えると漫画にもならない貧しい光景だ。だが描く方も見る方も真剣だった。この第一回公募展の出品作は会員十九人三十一一点、一般入選五十二人六十三点、計七十一人、九十四点という数字である。地名でいうと札幌、函館、小樽、室蘭、帯広、名寄、網走、岩見沢、倶知安、銭函、白老、士別、紋別、琴似、釧路、美唄、峰延、江別、伊達、深川からの出品者であつた。田中忠雄は第二回展の目録に、第一回展の感慨をつぎのように書いています。「これからの日本は文化国家として行くのでなければならぬ」とすると、文化国家としての日本はいまどの程度の水準にあるのだろうか、たとえば美術方面では?という質問をよく持ちかけられる。私は十数年前の滞欧中の見聞を例とすれば、少なくとも美術にかんしてはフランスなどにそう二歩も三歩もひけをとるものではないと答える。しかし戦時中から戦後にかけての状態となると、日本の場合、どう考えても進歩が止まつていたか、退歩したかと思うより他はない。……最近では美術界も非常な活況をとり戻した。中央美術界だけではなく地方の美術熱も盛んになつた。だがこれが内容的にいつて本当の充実であるかどうかは疑問である。その中で全道展の陳列作品には浮わつきがないが嬉しい。私たちは流行を作るのではなく、光つたもの、すぐれたものを選び出して、この不安な社会に慰めと喜びと希望とを与えなければならぬと、いまさらのように痛感する。第一回展のとき、観覧



洗剤!!

ママの

新しい

最も

新合成洗剤

ザン

ニュージユ

に米た二、三の米軍の人が、北海道という日本で一番歴史の浅い地方にこれだけの展覧会が開かれているとは想像もできなかったと語った。お世辞も含まれているかも知れない。しかし少数でも日本を知ることの少ない外国人にこれだけのことを知らせることで来たのは嬉しいことだった……」第一線作家をどうも、話題をまいて誕生した全道展は、外見の派手な動きよりも、地道な足どりでレールの上に乗って行つたのである。会場は札幌④デパート、そのときから現在まで会場はここから動いていない。

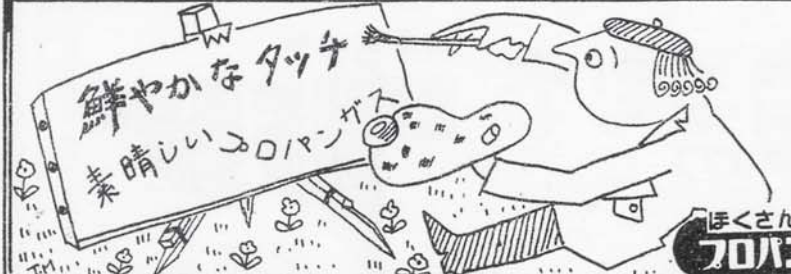
一方再建にかかつた道展は、全道展の第一回公募展より一月早く、昭和二十一年十月に第二十一回展、つまり戦後初の展覧会を同じ札幌④デパートで開いた。主要会員の去就はすでにはつきりしていたが、完全に混乱から脱していたわけではなく、いぜんとして両展の会員を兼ねる作家もあり、道展の受賞者が一月月後の全道展にも出品して会友に推薦されたり、道展の会友が全道展にも出品するということが珍しくなかつた。この整理がはつきりつけられたのは翌二十二年三月のこと、このとき道展は改組後の新事務局で会員を確認、若手会友陣を多く会員に昇格させて、全道展に去つた中軸会員たちの穴を補充した。いわゆる北海道における二大公募展並立の時代に入つたのである。全道展がその作家の質の高さと新しい意欲で話題を呼べば、道展は二十年の歴史と浸透し切つた人気でまた広く迎えられた。このほかやはり二十一年に第一回展を開いたものに北海道アンデパンダン展と北海道日本画協会展があり、戦後一年にして、ともかくも北海道にはさまざまな展覧会がいつせいに花ひらいたのである。

全道展の歩みは第二回展（二十二年十一月）第三回展（二十三年八月）第四回展（二十四年八月）第五回展（二十五年八月）とつづけられた。事務所は第一回から札幌市南一条東六丁目の松浦洋画材料店におかれ、第四回展から札幌市南一条西六丁目の老田洋画材料店に移つた。五回展までに新しく会員として迎えられ、会務に参画するようになった作家に、池田（沢田）豊二、谷口五二郎、鈴木伝、小島真佐吉、森本三郎、前田政雄、国井澄、岡部文

之助、本郷新、佐藤忠良、伊本淳、天間正五郎、八木保次、東政雄、松島鈴子、遠藤未満がある。

全道展のこの最初の五年間は、いまから考えてみると、その態勢整備の時期であつたように思う。組織は出来た。しかし組織を作ることが最後の目的ではない以上、会は一日も休むわけには行かなかつた。まず義務として考えなければならなかつたのは地方展の開催である。当初から全道的なスケールを持つことが全道展の念願であつた。そして第一回展の応募状況も予想よりすつと広く、道内各地にまたがっていた。交通事情さえよくなれば札幌だけでなく、地方にもこの展覧会を持つて行こうという声が全員の間広がっていた。第三回展（二十三年）札幌展終了後、函館④デパートを会場として初の地方展開催。函館には池谷寅一、岩船修三、金子幸正、田辺三重松、橋本三郎、前田政雄、平川勇という会員、会友を中心に十三人の出品者があり、張り切つて受け入れ体制を整えた。函館市、函館市立図書館、北海道新聞函館支社と地元作家の協力で初の移動展は大成功を収め、この年を皮切りに全道展の地方への伸張は積極的になされてゆく。第二回展（二十二年）まで秋の展覧会として十一月に開かれていた全道展は、この第三回展から夏の展覧会として八月に開かれるようになっていく。この理由は、本展終了後の地方展を日程に組むようになったからだった。第四回展（二十四年）は苫小牧の王子製紙クラブで地方展が開かれた。道展が帯広で移動展を開くようになったのも二十三年の第二十三回展からだ。終戦直後のショックからちよつとひと息つき、輸送事情も少しは楽になつてきたのである。

全道展が当面したもう一つの問題は疎開作家の引き揚げという事実である。戦争が終わり、世の中が落ちつくにつれて、東京から北海道に疎開していた作家はぼつと引き揚げ出した。一緒に顔をつき合せて全道展の創立をねり、あるいはその計画に賛同した作家たちのうち、第五回展（二十五年）までに三雲祥之助、小川マリ、菊地精二、上山山清真、川上澄生、田中忠雄、松島正人が本州に引き揚げた。これはある意味では全道展が早々に直画



設備費 2,500円  
ガス代  
10K 1,000円  
5K 550円  
北酸商事KK  
札幌市北三条西一丁目  
でんわ(1)6710-4

ほくさんの  
プロパンガス

した一つの危機であつたといえるかもしれない。しかしこのことについては第三回展（二十三年）の目録の編集後記につきのように記されている。『全道美術は疎開画家の集まりだから、そのうち駄目になるとかなんとかいいう声がか聞こえる。だいたい疎開画家なんていう名前がいまでもあるのが変な話だが、全道展が駄目になるかならないかは、第二回展、第三回展と次第に充実して行く内容を見ればおのずからわかることだと思ふ。あとからあとからと優秀な作家が出て、全道展を踏み台として中央画壇に登場するものがすでにいく人もある。多分これからすぐれた新人は続々発見されるだろう』（田中忠雄）。第五回展当時の全道展は会員三十四人、会友十二人、展覧会の陳列作は百十九人、百五十八点に達した。すでに創立会員たちに次ぐ第二の世代がはつきりした一つの層を形作り、運営はその世代に任せられつつあつた。そして逆に、東京と北海道を強くつなぐ展覧会としての全道展の性格が、この時期に固められていた。東京に引き揚げた作家たちは年々できるだけ全道展のために来道しては鑑審査に当り、新しい力作を全道展に発表した。全道展は全道的なひろがりを持つとともに、東京との通風口を数多く持つことによつて、単なるブロック展にとどまらぬスケールを身につけ、それを展覧会の性格にしよつとした。また東京に帰つた作家たちがそれぞれ、東京で活躍している北海道関係作家を勧誘して全道展に招き、それが展覧会の厚みとなつてきたことも見逃がしてはならない。『旅行者が旅先がかりそめに作つたのが全道展じやないか』という一部の誤解とは似ても似つかぬしつかりした足どりで、全道展は第五回展までにははその態勢を整えることができたのである。

引揚同胞援護のための色紙、肖像揮毫会（昭和二十二年）、会務増大のため入場料をとり出したこと（二十五年）第五回展、会員木田金次郎退会（二十四年）などの動きを間にはさんできたのち、やはり二十五年の十一月、会員田辺三重松に北海道新聞文化賞（社会文化部門）が贈られた。個人の業績ももとより、全道展を通じてのすぐれた作品発表と後進育成、大きな貢献が認められ

たのであつた。

### III

全道展十五年の歩みをふり返るとき、だいたい四つの時期に区分してこれを考えることができようと思ふ。第一期は戦中戦後の空白時代から新しい展覧会設立の意欲が高まり、ついに全道展の創立をみるまで（昭和二十八年八月〜二十一年六月・創立展）、第二期は創立してからのいろいろの困難と直面しながらだいたいこの態勢確立をみるまで（昭和二十一年十一月・第一回展〜昭和二十五年・第五回展）、第三期は作られた骨組に具体的な肉づけがなされ、ほぼ初志を達するまで（昭和二十六年・第六回展〜昭和三十年・第十回展）、第四期が完成されたものの閉鎖化を排して新風を吹きこむ努力にかかる時期（昭和三十一年・第十一回展〜現在）である。

第二期の仕事を終えた全道展は創立六年目に入り、会の充実化を、組織のうえでも、個々の作家のうえでもはかつていた。創立会員のうち二十六年には山内壮夫、二十九年には西村喜久子が東京に引き揚げたが、在京作家は全道展東京支部として強力に在道作家を支援したため、会の陣容が手薄になるような心配はまつたくなかつた。第六回展から第十回展までの間、東京支部では齋藤清を会員に推薦して版画部門を強化、北海道では本田明二、谷口一芳、大谷久子、鎌田雛子、岸葉子、八木伸子、栃内忠男という若手の作家が相ついで会員となり、ベテランにかたよりすぎるといわれた全道展に新しい空気を入れ始めた。創立会員たちがパトロンを渡すに足りる、若い実力作家が続々と誕生したのは、創立以来の会の行き方に誤まりのなかつたことを改めて証明したものだといつてよいだろう。全道展生え抜きの作家たちがどのような活躍をみせてくれるか、これがこの第三期、つまり第五回展から第十回展までの一番の関心事だつたのである。初めは、どちらかといえはまじめで地味な作品が多く占めた全道展だつたが、この時期に入ると、全道展の作品はにわかにはわかにはびのびとそれぞれの個性

## 新 川 分 譲 地

百聞は一見に如かず  
年中無休 自家用車で無料御案内

## 琴 似 不 動 産

奥 野 悟

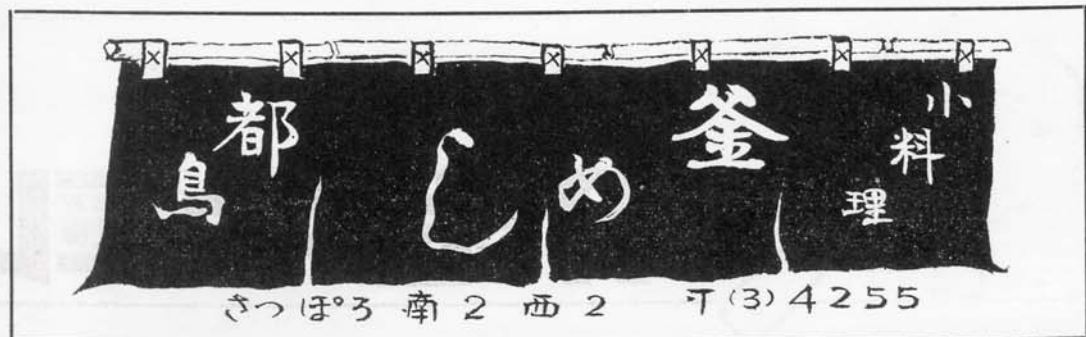
T 4-4772 4-3596 2-5450

を發揮し出し、にぎやかな色彩を増している。地固めを間違いないく終えたからだ。習作時代を手堅く送つたからだ。単なる事物の描写にあき足らなくなつた作家が、自由に自分なりの試みを展開させたところからこのはなやかな時期が訪れた。伊藤信夫の雪景の澄んだ境地、柄内忠男のあらあらしく量感に富んだ裸婦、国松登の詩情豊かな魚眼のない魚、田辺三重松の勇こんな北海道風景、橋本三郎の達者な造型的な試み、小川原脩の土俗的な凶太さ、遠藤未滿の燃える野火さながらのはげしさ、上野山清貢の飄逸味ある独特の画風、小島真佐吉の新牧歌調、田中忠雄のキリスト教的主題の追究、岡部文之助の情味ある風景、三雲祥之助の人物の新しい實在感、小川マリの格調の高い静物、菊地精二のはげしくつややかな裸婦、松島正人のいきいきした風景、居串佳一の民俗的なロマン、数えあげればきりがなが、これらのユニークな世界が互いにひき合い、はなかえり合つて作る全道展という会場のふんいきはまことに弾力にみちた楽しさを持つていた。この現象は決して偶然のものではない。昭和二十四、五年まで、東京で開かれた話題の展覧会は、ほとんどが過去の作品の回顧展「近代日本洋画展」「近代日本美術総合展」「梅原・安井回顧展」「現代美術自選代表作十五人展」「坂本繁二郎自選回顧展」「児島善三郎滞歐作回顧展」それに「泰西名画展」などであつた。国画会、独立美術協会、春陽会、美術文化協会、光風会、創元会、二科会、新制作協会、一水会、行動美術協会、日展、二紀会、新樹会、自由美術家協会、日本アンデパンタンなどは二十一年から二十二年にかけて復活あるいは発足しているが、まだ作家たちの本格的な作品の発表の場とはなつていない。それぞれの作家が壁をつき破つて、真に個性的な仕事に入ることができたのは、やはり二十五、六年以降のことなのである。

全道展が生んだ新しい作家たちの中で、とくに目立つのは一群の女性作家である。創立会員の中にも小川マリ、西村喜久子という二人の女性が含まれているが、その後全道展に出品した女性作家にはすぐれた素質を持つものが少なかつた。創立展で受賞

した三上恵美子、石沢ミヨもそうだが、第二回展「道知事賞・大谷久子、札幌市長賞、花谷時子、会友推薦・大谷久子、花谷時子、第三回展「奨励賞・松本(八木)伸子、第四回展「協会賞・松島鈴子、道新賞・小西(岸)葉子、道知事賞・松本伸子、会友推薦・松島鈴子、第五回展「協会賞・鎌田雛子、道知事賞・三津谷理与子、会友推薦・小西葉子、松本伸子、第六回展「会友推薦・三津谷理与子、鎌田雛子、第八回展「奨励賞・藤本俊子、会員推薦・大谷久子、鎌田雛子、岸葉子、八木伸子、第九回展「会友推薦・藤本俊子。第一回展から第十回展までの間に女性作家の受賞だけでこのような記録がある。とくに小西(岸)葉子、松本(八木)伸子、大谷久子、鎌田雛子がくつわを並べて進んで行く姿は壯観といえた。小西(岸)葉子はむき立てのトマトのようなみずみずしい裸婦、松本(八木)伸子はつましやかな片すみの静物、大谷久子は人体の構成や動きの近代的な分析、鎌田雛子は静物の組み合わせを抽象に煮つめて行くというふにそれぞれがはつきりと自分だけの方法と世界を持つていた。これらの作家が特別際立つた形で全道展の新人のトップに立ちつづけたのは、女性特有の感受性の強さとナイーブな持ち味が、全道展の自由な空気の中でなんの抵抗も受けずに、一挙に伸び育つたからだともいえるだろう。花谷時子と三津谷理与子も当然これらの作家と並んで進み、全道展の女性作家の充実ぶりをいつそう強く認識させるはずの人だつた。しかし花谷時子は第六回展(昭和二十六年)のさいに自作の陳列の扱いに不満を申し立てて作品を撤去、脱会した。三津谷理与子はやはり第六回展に三点入選、会友に推薦されたのち、突然自殺して人を驚かせた。

函館、苫小牧で大成功を取めた地方展は、この時期にはさらに大きなスケールで行なわれた。第六回展(二十六年)は小樽、倶知安、美唄、第八回展(二十八年)は旭川、美唄、函館、第九回展(二十九年)は旭川、室蘭、美唄、函館、第十回展(三十年)は室蘭、函館、小樽、美唄、旭川、北見でそれぞれ開催。設備は十分ではなかつたが、この地方展は地元の人たちに大好評を博



し、それぞれ担当して作品とともに地方に派遣された会員たちは、作品陳列、解説、座談会、講演会に天手鼓舞のありさまだった。美明ではいちいち靴や下駄を脱いで上がる会場で連日満員の観衆が押し寄せ、北見では派遣された会員が、フアンからサインを求められるという嘘のような話が現実起こったりした。地方展を開催した土地からは、翌年出品者数が激増、その質も数段向上した。展覧会を求める声の強さは、その土地に行つてみて、はるか予想以上のものであることを、会員たちはみんな痛感して帰つてきた。

老田洋画材料店にあつた全道展の事務所は第七回展（昭和二十七年）から札幌市北十六条東一丁目の本田明二のところに移つている。本田明二はシベリアでの抑留生活を終えて帰国、第六回展に三点の彫刻を出品して会員に迎えられたが、会事務がふえてきたさ中こので事務所を会員のところにおく必要を痛感した会は早速本田明二にこれを委ねた。全道美術協会の規約ができたのもこのときのこと、それまではなんとなく話し合ひですべてが運営されてきた。考えればのんびりした話だが、それで結構面倒はなかつたのである。一年一度の本展と地方展だけに力を注いできた全道展は、二十八年と二十九年、いずれも十一月に札幌大丸ギャラリーで会員小品展を開いている。作品発表の機会を少しでも多く持とうという意図で、美術家と語り合うのが飯より好きだという大丸の村井安太郎もこの話に大乗気になり、積極的に壁面を提供してくれた。二十八年の秋には会員上野山清貢が北海道新聞文化賞（社会文化部門）を受けた。老境に入つてますますかくしやくたるところをみせるそのフアイトは、全道展の中でも一つの名物になつていた感さえある。

そして昭和三十年、全道展は、その歴史の中でも一つのクライマックスである、第十回記念展を迎えることとなつた。

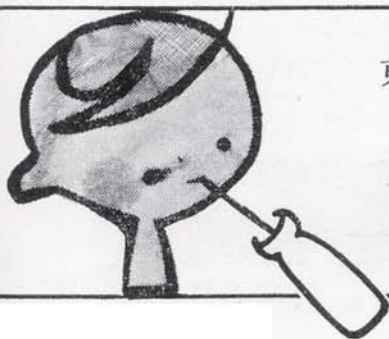
## IV

第十回全道展の開催にあたり、会は記念画集の冒頭につきのよ

うな一文を掲載した。〃全道展が歩いてきた十年間は、北海道美術界にとつても、その著しい飛躍ぶりにおいて記憶されるべき十年間であつた。「北海道の美術文化の水準を高め、これの普及に貢献すること」を謳つた全道展創立の目的は、この十年で一応果たされたものといえるだろう。だが十歳に達した全道展は、いま決して誕生当時と同じことばかりを考えているわけには行かない。周囲にも十年の時の流れはあつた。全道展は、過去の実績を踏み台として、休む間もなく新しい目的に向かわなければならぬ。北海道の美術界が全道展に望んでいるのは、そんなにはげしい重労働なのである。……こんご全道展に期待するのは、一美術団体としてではなく、あくまで社会と密着した一文化団体としての自覚と行動である。画家がただ絵だけを描いて他の一切にはかまわぬという時代は過ぎ去つた。たとえ美術館建設運動にも、生活改善運動にも、あるいは政治運動にも、全道展は一つの指導的存在として、雄々しく先頭に立たなければならぬだろう。つぎの十年間は、この意識の硬さが、大きくものをいひそうな気がするのである。〃（竹岡和田男）十年たつて全道展が反省しなければならなかつたのは、美術家というわくの中だけで、あるいは全道展というわくの中だけですべてを判断することがなかつたか、ということである。これは会が軌道にのるまではある程度許されることだが、度が過ぎればそれは美術家ないし会の孤立、遊離を意味してしまう。第十回展（三十年）は記念展の名にふさわしくきやかな内容を持つものであつた。すぐれた作品を通じて社会に貢献したため受賞の対象となつた田辺三重松、上野山清貢・北海道新聞文化賞受賞特陳、美術映画と講演の夕、会員色紙即売会など、会自体の行事というよりは、鑑賞者対象の催しとして新たに登場したものである。このほか記念画集の発行、記念手拭の発売、記念パーティーと創立会員およびデパート函館支店、富士鉄室蘭製作所、三菱美唄鉱業所への感謝状贈呈、またこれら地方展への貢献者同様、会の発展に尽力した大丸藤井商店、野田額縁店、服部額縁店、松山額縁店、札幌デパートの謝意表明などがこの第十

東京スタイルのステキな牛乳

明治牛乳



回記念展を機会になされた。第十回展当時の会員は四十六人、会友は十二人という陣容、陳列作品は百七十八人、二百二十点に達している。作品の内容はほとんど抽象に傾いていた。これは全国的な傾向であったが、全道展の若い出品者たちは、自由に自分のやりたいことを伸ばす会の空気の中で、敏感に現代を身に感じ、それを多く抽象という形態の中で表現して行こうと努めた。この抽象への傾倒は、やがてマンネリズムを招き、浮薄な技術主義に陥る例を多くするが、この第十回展前後の抽象作品は、表現技巧にさはり高度なものも少なくなく、その発想にみずみずしい魅力をつたえていた。

会の運営は第十回展以降、ほとんど若い新会員の手にゆだねられる。第十四回展（三十四年）までに北岡文雄、赤穴宏、砂田友田、平川勇、藤本俊子、原義行、竹内豊、小野垣哲之助、長谷川晶、木村良、難波田竜起、望月正男、大本靖、米坂ヒデノリ、山岡三秋が会員になり、会務は三十一年から札幌市北二十条東七丁目に移居、いぜんとして事務所を受け持つ本田明二を中心に、国井澄、谷口一芳、柄内忠男、砂田友治、竹内豊、原義行、小野垣哲之助、大本靖、それに三十四年北海道文化賞を受けた国松登が小樽から札幌に移居し、これに加わって行なうこととなった。いかにも全道展の若返りを思わせるメンバーである。札幌の事務局（会務委員会）、東京支部（小島真佐吉）のほか函館支部（池谷寅一）、小樽支部（鈴木伝）、室蘭支部（渡辺真利）も設置された。事務所のほかに大丸藤井画材部に全道展連絡所を設け、会員相互の連絡を密にするようにはかつたのも第十一回展（昭和三十一年）からである。

第十回展で打ち立てられた会の社会的活動の強化は、その後も引きつづき会の方針として実行に移された。美術映画と講演の夕は、第十一回展（三十一年）第十二回展（三十二年）第十三回展（三十三年）第十四回展（三十四年）と休むことなく行なわれ、毎回満員の聴衆を集めて全道展の名物行事の一つになった。開始以来五回を通じて国松登、岩船修三、北岡文雄、菊地精二、松島正

幸、山内壮夫、小川原脩、宮下貞一郎らが講演「フランスの美術」「北斎」「近代フランス絵画史」「絵を描く子供たち」「若い美術家たち」「一つのメロディーと四人の画家」「ユトリロの世界」「古代の美」などの映画が上映された。また第十二回展では初の試みとして会員の指導による美術講習会を開催、三十五年からは高校・大学生を対象とする公募展、学生美術全道展を新たな事業として開始、若い世代の間に高まる美術熱を正しく導くのに大きな役割を果たすこととなった。移動展はその後引きつづき第十一回展（三十一年）室蘭、函館、小樽、美唄、旭川、北見、釧路、第十二回展（三十二年）室蘭、函館、小樽、旭川、北見、釧路、第十三回展（三十三年）室蘭、函館、小樽、旭川、釧路、北見、第十四回展（三十四年）室蘭、函館、小樽、釧路、北見で相変わらぬ大きな成果を収めてきた。

全道展が第十回記念展を迎えた昭和三十年は同時に道展の第三十回展という記念すべき年でもあった。道展でも終戦直後の再建時の会員をつぐ世代ともいえる若い作家たちが続出して張りのある作品を発表して、この記念展前後に戦後の最盛期を築き、全道展、道展相並んで北海道美術界の質を高めたのだ。三十一年には新たな公募展として新北海道美術会（新道展）が発足、第一回展を開いている。道展・全道展の並立時代から道展・全道展・新道展の鼎立時代に入るわけだが、正直な話、三十年以降の北海道美術界には並立や鼎立を意識させるような動きは、しばらく皆無にひとしい状態であった。それは北海道美術界自体の大きな成長のためでもあるけれども、時代が単独孤立を許さなくなってきたせいでもある。大きなものでは美術館建設問題、北海道美術家協議会（北美協）の発足、道博総合美術展の開催など、政治的な動きでは警備法、安保条約問題など、個人や単独団体の動きだけではどうにもならない事態がつきつきに登場してくる。美術界の動きは、道展や全道展の問題ではなく、美術家全体の問題として、あるいは文化にたずさわるもの全体の問題として考えなければならなくなってきたのである。会や派に関係なく、美術家同士いや

御贈答に

トヨー社の罐詰を



トヨー社 ブル

支店 札幌市南2西3 ③2903

本店 小樽市花園町東2 ②0314

お好み

カレーライス





人間同士手をにぎり合つて事に対処しなければならぬと自覚したのが、この昭和三十年以降の顕著な特徴だったのである。個々の作家や作品の進歩も重要なことには違いないが、昭和三十年代前半の、北海道美術史上における意義は、なによりもこの顕著な特徴にあるだろう。

この大事な五年間に、全道展は何人かのすぐれた作家を失わなければならなかつた。その一人は創立会員居串佳一の札幌での客死（三十年）である。仕事の主題はますます北方的なロマンを追究していたようだ。仕事の中にとげこんでいる君らしい情愛と造型精神がこれからだれもやらない世界に近づこうとして、そういう逞ましさをみなに感じさせながら、ポッキリ折れた感じがする。と菊地精二は書いた。その二人は会員岡部文之助の病死（三十一年）である。松島正幸はつぎのように故人を偲んだ。＼なくなる二年くらい前から形より色彩に、強烈な原色が動き出してエネルギッシュな明るく強い感じになってきた。病勢がかなり進んでも作品ははなやかで、だれにも死の影は見せなかつた。はつきり死期を覚悟して大悟しているようだった。私にはあんなに悠々と人生にさよならできる自信はない。三十三年には創立会員伊藤信夫も病気で世を去つた。田辺三重松は、君は派手に画壇にアピールをすることをしなかつたようだが、年を増すごとになにかひたむきなものが現われて、近ごろはいよいよ本腰をあげると感じさせてきた。恐らく君は定年近い職場の仕事と画業とを綿密に計算して、新しい第三の人生を打ち立てようとしていたのではないだろうか。病床にあつても、その新しい人生のため、一日も早く床を払つて画業一本の夢を抱き、そのまま永遠の旅に立たれたのであろう。と哀惜の念を述べた。そして三十五年、創立会員上野山清實が病死した。奇行の人といわれ、晩年まで熱のこもつた独自の作風で万人に親しまれた作家だつた。死去したのが一月一日というも飄々たるこの人にふさわしかつた。これらの作家の死を惜しんで、全道展はその都度遺作展を開催、生前の代表作を陳列して業績を偲んだ。また三十二年に病死した室蘭の出品者

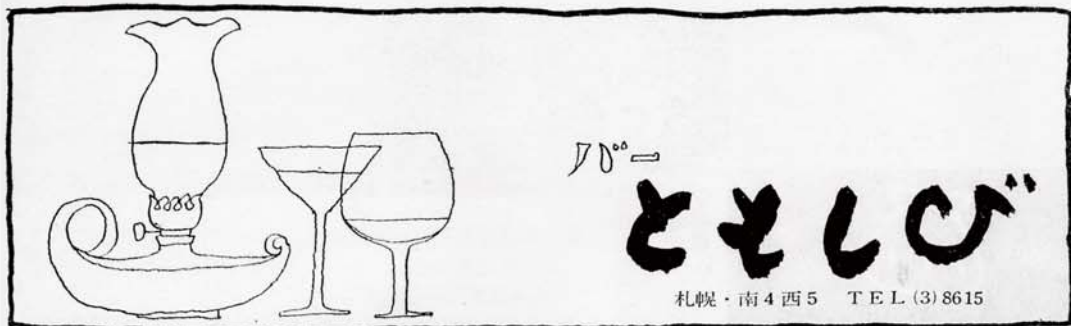
田中吉蔵は前年度全道展に奨励賞を受けて将来に期待された作家である。

昭和三十四年の第十四回展で全道展は思い切つた厳選主義にふみ切つた。美術は盛んになる一方だつたが、美術館を持たない北海道では壁面に窮屈さを感じる一方である。これに順応する方法は、会場の醜さを覚悟の上でふえる出品者に迎合して入選作をふやすか、あるいは会場の整理と展覧会の質の向上に話をしほつて厳選を強行するか、この二つに限られる。全道展は敢えて後者を選んだ。これによつて、真に選ばれたもののみのすぐれた展覧会にし、また展覧会の情実とマンネリズムを一掃し、出品者にきびしいはげましを与えようという企図である。ややもすれば公募展がおちいり勝ちな出品と鑑審査の情性化を、ここでけじめをつけて防ぎ、＼真に光つたもの、すぐれたものを選び出して育てよう。という最初の純粹さに戻ることもあつた。HBCが初の展覧会場からのテレビ中継を試みて成功するなどの話題もあつたが、内部の問題として、この純粹性の保持は、こんごもずつと考えられなければならぬ、その実行と確信が第十四回展の大きな収穫であつたのだ。

しかし、くり返していえば、昭和三十年代前期の特徴、会が美術界の一部、いや社会の一員として幅広い活動を方向としたということは、これからも、片ときも忘れられてはならないだろう。全道展なり美術団体なりが動いたというのは、あくまでも広い人間社会の中に融合して、その中に成果を見いだしたときのことである。美術界だけの遊離、ましてや団体や作家の遊離、相互の無意味な反発などはもつともいまいしめなければならぬ。

昭和三十五年、こうした情勢と自覚の中で全道美術協会は第十五回展を迎えることとなつた。

◇本稿は松島正幸、山内丈夫、国松登、本田明二、竹内豊、関口二郎の諸氏の談話と資料を基にした。文中人物の敬称は略させてもらった。



とよこび

札幌・南4西5 TEL (3) 8615